



ゴッタン

を語れ!

南九州の弦楽器ゴッタンと、
それをめぐる人々を紹介

GOTTAN

ゴッタンプロジェクト

Gottan Project

本プロジェクトは、南九州地方に伝わる弦楽器「ゴッタン」の製作技術の記録、その歴史や音源に関する基礎資料の収集、ゴッタンの演奏者、職人、研究者などの交流を育むことにより、ゴッタンの継承と活性化の一助となることを目指して2018年にスタートしました。

きっかけは、約10年程前にゴッタンに出会いその後演奏を続けてきた黒坂周吾（京都在住／プロジェクト共同代表）が改めてゴッタンのルーツを巡って南九州地方を旅したことでした。そこで、黒坂はゴッタンの名手として知られた故・荒武タミの最後の弟子である橋口晃一（プロジェクト共同代表）と出会い、共に現地の演奏者や職人を訪ねてまわりました。その中で見えてきたことは、職人の高齢化という厳しい現実とともに、若い世代でもゴッタンを作り、また演奏していこうとする方々の姿でした。

プロジェクトでは、2018年11月に南九州地方でリサーチを行い、若手職人である上牧正輝さんの工房のほか、永山成子さんの稽古場や先生が子ども達にゴッタンを教えている

たから べ きた
財部北小学校、甕島で子どもから大人までゴッタンを楽しむ福居一大会甕島ごったん部、荒武タミが使用したゴッタンを所有する鳥集寿一さんなどを訪問しました。この冊子は、そこで出会った方々とその取り組みを紹介するために作成したものです。

現在（2019年3月）、上牧さんのご厚意とご協力により、写真や映像で製造技術を記録する作業が進行中です。さらに、現代の演奏環境に対応しやすいゴッタンの製作にも取り組んでいただいています。また、2019年4月には鹿児島市内でゴッタンの演奏家によるライブと交流会を開催します。

今後も、ゴッタンを通じた交流の輪を広げていきたいと考えています。

*「ゴッタンプロジェクト」は、ゴッタンの製造技法および基礎資料のアーカイブと交流ネットワークを創出するプロジェクトで「平成30年度伝統芸能文化復元・活性化共同プログラム」で採択されました。伝統芸能アーカイブ&リサーチオフィス（京都市、京都芸術センター）と共同で実施しています。



ゴッタンについて

田代俊一郎

南九州(旧薩摩藩内)の伝統的な民俗楽器、ゴッタンについて新聞で連載したのは一昨年である。それ以前に「声の文化」の視点から九州の民謡や肥後琵琶を連載していた。その取材の中でゴッタンという楽器があることを知った。南九州という地域限定の楽器というだけではなく、ゴッタンという名前そのものからして正体不明の独特な響きがあり、魅惑的な光彩を放っていた。鹿児島県の霧島山麓を中心に取材をする中、口伝、放浪芸、語り芸などの要素が詰まった、奥深い豊饒な世界として立ち現れた。ただ、常套句として「幻の楽器」とよく形容されるが、その出自や履歴についての本格的な学術研究書は調べた限りではほぼなかった。「なにがなくてもゴッタン」。こう言われるほど一時期、庶民の炉辺にありながら記録が希薄ということは逆に、この楽器の特性を浮き彫りにしていた。

ゴッタンは「箱三味線」と言われるように、三味線の改良型である。三味線と決定的に違うのは胴の部分が三味線は皮張り、ゴッタンは板張りであることだ。材料の基本は杉である。皮より安価であることが普及に一役買ったことはいうまでもない。その大きさについては製作者によって差異はある。かつては「大工が作る楽器」と言われ、家を新築したとき、担当した大工が新築祝いにゴッタンを贈るのが習わしだった、と言う。現在、鹿児島県内には製作者が数人いて、伝統の技を引き継いでいる。その内の一人である宮崎県三股町の上牧正輝さんの規格を紹介したい。縦20、横19センチの胴に2.5〜3ミリの板を張る。棹の長さは92.5センチほど。三本の弦はウコンで染めた絹糸だ。胴の形は角型を基本に丸形もある。この規格は長い歳月の中で、よ

りよい音と形を求める創意工夫によって進化した型であって、初期段階では作り手によってまちまちだったと思われる。土地の人が「使わない木の弁当箱を胴に、割った竹を棹にして釣り糸を弦にして作ったことがある」と語るように、自作の遊び道具やジャンクアートの要素があった。壊れれば薪代わりにもなった。安価と手軽さ。こういったこともあって古い時代のゴッタンはほとんど残っていないため、楽器自体の発展史が不透明になっていることは確かだ。異色で特異な楽器、ゴッタンはいつ頃に生まれ、どのように普及していったのだろうか。

ゴッタンの基になったといわれる三味線は中国から伝来した楽器の三弦の改良型である。一説では三弦は室町時代に交易が盛んな中国から琉球に伝わったと言われ、江戸幕府がスタートしてまもなくの1609年、薩摩藩は琉球王朝を支配下に置いた。いち早く、当時としては新しい楽器として薩摩藩内に伝わったと思われる。三弦—三味線(三線)—ゴッタンという系統図になる。ただ、なぜ、薩摩だけ三味線から、さらにゴッタンという形に突然変異したのか。

ゴッタンは三味線のようにパチで弾くのではなく、主に人差し指で弾くのも特徴だ。その音について、製作者の上牧さんは「三味線をギターに例えるならゴッタンはベースのようなものです」と説明した。三味線より低く、柔らかい音と言え。言い換えればゴッタンは単独演奏ではなく、歌を引き立てる、伴奏楽器に適していたということだ。メインの歌謡がなければゴッタンは普及、発展しなかった。

戦乱の世から社会が安定した江戸時代は娯楽、趣味の時代の始まりであった。特に民謡、語り物など歌謡の黄金時代が到来し、それは薩摩藩内でも例外ではなく、それ以上に明るい薩摩人気質は歌を好み、土着の民謡が次々と生まれた。こうした歌の時代を大きな背景にして江戸初期頃に、ゴッタンは生まれ、発展、普及したというのが一つの推論だ。

当時、伴奏楽器として三味線は高価で、庶民にとっては高嶺の花だった。「三味線は花柳界の楽器で、ゴッタンは庶民の楽器」という言葉がある。まさ



ゴッタン(上牧正輝さんの木工工房にて)

に、必要は発明の母である。その庶民の発明のヒントになったのが薩摩琵琶ともいえる。薩摩藩はその勇壮な語り芸の琵琶音楽を奨励した。琵琶は皮張りではなく、板材の弦楽器である。ゴツタンとの共通項を見いだすことができる。琵琶に似せて作った、というアプローチも見逃せない。

もう一つの視点はゴツタンの普及をリードしたのは視覚障害者である。もちろん、当初は家々でだれでも楽しむ楽器だった。その幅広い大衆性がプロの弾き語りを生み出すことになるが、その軸になるのは視覚障害者だった。九州では薩摩琵琶、肥後琵琶など琵琶演奏の盛んな地域だった。その流れの一つは「盲僧琵琶」とも言われ、視覚障害者に開かれた職業であった。ゴツタンもまた、同じだった。「北の長岡(新潟県)瞽女、南の薩摩瞽女」との言い方がある。特に薩摩の中では「知覧瞽女」との言葉が残っている。元鹿児島大学教授(民俗学)の下野敏見さんは取材の中で「知覧には毎年、瞽女の多く集まる場所があった」と言った。このことが意味するのは知覧にはプロ集団の相互扶助的なネットワークの拠点があったということだ。裏を返せば、ネットワークが成立するほど多くのプロのミュージシャンがいたという証しであり、それだけ聴衆に支持される芸能だった。こういった地域限定の独自の庶民文化だったゴツタンを、スポットライトを浴びる存在に引き上げたのがゴツタン奏者の荒武タミさん(1911~1992年)である。

タミさんは1977年、東京の国立劇場で企画された「日本音楽の流れ—三弦」の中に出演した。南の野に埋もれていたゴツタンがペールを脱いだ。その弾き語りはLPレコード「ゴツタン—謎の楽器をたずねて」(CBSソニー、1978年発売)に収録されている。タミさんは5歳のときに、はしかにかかり、視力を失った。当時、三味線やゴツタンなどは習い事の一つだった。タミさんは幼い頃から母から民謡などを習っているが、プロの門をたたくのは13歳頃だ。放浪芸の流れを汲む師匠も視覚障害を持つ芸能者だった。タミさんも18歳のときは家々を回る放浪芸、門付けを始めている。師匠から習うのは流行歌ではなく民謡、語り物といった日本の伝統歌謡だ。それもすべて口伝である。「歌が先、サンセン(三線)な、そのツレ(伴奏)」。タミさんは弟子で、民



荒武タミさん(1984年度鹿児島県総合美術祭 開幕公演)

俗芸能研究家の鳥集忠男さんにこのように語っている。語り物は中世に始まり、近世に開花し、明治、大正、昭和中期頃まで大衆に支持された口承芸能である。演目は主に江戸、大坂発だったが、地方に伝わる中で歌詞や調べに土着性が増されていった。国立劇場で脚光を浴びたのはゴツタン奏者としてだけでなく、近世歌謡を正統に引き継いだ最後の芸能者だったことにもある。

タミさんのいわばメジャーデビューはゴツタン再評価につながるが、「一家に一つ」とも言われたゴツタンは家庭から徐々に姿を消しつつあった。明治維新によって西洋音楽が導入され、敗戦によって伝統音楽は古いものとする風潮へ変わった。さらに、1953年には娯楽の座を奪うテレビ放送がスタート、並行して習い事文化も衰退していく。こういう時代の流れにゴツタンも無縁でなかった。

最後にゴツタンというミステリアスな名前の由来について触れなくてはならない。ただ、定説はない。諸説を列挙してみた。

- ① ゴツタマシ(雑でごつい)の「ゴツ」とスカタン(不細工なもの)の「タン」が一緒になってゴツタンになった。
- ② ゴツは三味線と違ってゴツンゴツンとした音を表している。
- ③ 中国の少数民族が使用していた三弦琵琶を現地の人が「グータン」と呼んでいた。

どの説も中国から伝来し、薩摩で改良され、素朴な作りと音で庶民に浸透、愛され、オリジナルに富んだ楽器であるという思いは共通している。

ゴツタンは消えた楽器ではない。製作者の上牧さん、そして地元のミュージシャンのサカキマンゴーさんや京都市の和太鼓バンド「バチ・ホリック」の黒坂周吾さんなど若い世代がゴツタン奏者として引き継いでいる。また、地元でもゴツタン継承へ地道に活動している団体や人もいる。ゴツタンは約四百年の歴史を重ねながら、いくつかの謎と迷宮を秘めたまま現在もその音を刻んでいる。

ゴツタンをめぐる人々



P.10 橋口晃一

荒武タミ最後の弟子／ゴツタンプロジェクト共同代表



P.13 鳥集寿一

タミのゴツタン「太郎」を所有



P.17 財部北小学校

荒武タミゆかりの地



P.22 サカキマンゴー

ミュージシャン



P.23 寺原仁太

山田村文化センター代表／ミュージシャン



P.24 東将寛

ミュージシャン



P.26 坂元厚太

ゴツタン演奏者



P.27 松浦麻子

ゴツタン演奏者



P.25 渡邊竜聖

ゴツタン演奏者

P.15 永山成子

鹿児島民謡研究・演奏家



P.19 齊藤純子

福居一大会戦島こったん部



P.28 原田敬子

音楽家



P.31 上牧正輝

ゴツタン職人



P.33 黒坂周吾

ミュージシャン／ゴツタンプロジェクト共同代表





ゴツタンと私 橋口晃一



1984年、一枚のレコードをきっかけに、荒武タミの最後の弟子になった橋口晃一。25歳だった当時から現在まで、唄とゴツタンの演奏を続けながら、ゴツタンに関わる人を繋いでいる。自身のウェブサイト¹「あらいくまのページ」(<http://bachsaloon.jp/>)では、荒武タミの音源や稽古の様子も紹介。本プロジェクトの共同代表。

「あんたは唄が上手やったら良かったとになぁ」

35年前、師匠から頂いたありがたい一言。ゴツタンは芸を披露するためのものではなく、身近な人たちと一緒に心地良く楽しいひと時を過ごすための道具として捉え、それから、そんなゴツタンとのつき合いが続いています。

24歳のとき、学問(数学)に没頭して生活の糧を得ることの難しさに挫折して社会へ飛び込む覚悟を決めながらも、何か心の拠りどころになるものを探しているとき、偶然出会った「ゴツタン弾語り^{*1}」に衝撃を受け、鹿児島県曾於郡財部町大川原在住の荒武タミ師匠に弟子入りしました。約一ヶ月間に延べ60時間ほど「昔物^{むかしもの}」とよばれる唄を手ほどきして下さって、最後に師匠から頂いたのがこの鼻向けの言葉でした。

弟子入りしたのは、音楽性だけではなく、師匠の伝記^{*2}を読んでその生きざまに感動し、また、おふくろからも改めて当時のごしまの田舎暮らしの様子を聴いたりしたことで、その風情をうつしたす素晴らしく貴重な「昔物」を伝承したいという思いに駆り立てら

^{*1} 1978年5月 CBSソニーから発売されたLPレコード「謎の楽器をたずねてーゴツタン」

れたからです。

南国鹿児島でも特に大川原の冬はかなり寒いので、電気炬燵に師匠と向かい合い、それぞれ三味線をもって座り、キッチンタイマーできっかり一時間ずつ、そして稽古の間には手を温めながらいろいろとお話を伺う。1日おきに4~5時間、延べ13日間のレッスンは学生生活最後の貴重な経験となりました。

その後、東京で社会人生活が始まってからは、鹿児島に帰省したときは身近なお年寄りの前でゴツタン片手に昔物を唄ったり、同僚の結婚披露宴でも鹿児島ゆかりの親戚がいらっしやれば余興で披露したりしましたが、お年寄りの多くは昔のことを懐しむのか、涙ぐみながらとても喜んでくれるものでした。そんな反応にこちらも嬉しくなりました。

しかし、お年寄り世代が少なくなるにつれ、次第にゴツタンを弾く機会も希になり、そこで忘れないうちにと自身のWEB上にタミ師匠との思い出を掲載し始めたところ、最近になって、若い方々からゴツタンについて問い合わせを受けるようになりました。このパンフレットにも登場されているように、現在、多くの方々がそれぞれに独自のスタイルでゴツタンを大切に使用され、ありがたいことにそんな皆様との交流を楽しんでいます。その出会いのきっかけは、私が荒武タミ師匠の弟子であったことです。更にそこから、これまで知る由もなかったいろんな方面の方々との出会いへと広がり、貴重な体験の機会を得て数多くのことを学ばせて頂いています。まさに、一緒に楽しいひと時を過ごすための道具であるゴツタンが導いてくれたご縁であり、改めてタミ師匠に感謝しています。

一方、楽器としてのゴツタンを語るなら、私はそこに「素朴だからこそ豊かな魅力」を感じます。有り合わせのものを使用するという意味では終戦当時の沖縄のカンカラ三線やアフリカの親指ピアノを、また、純粹で深みのある響きという意味ではリコーダーやト



^{*2} 南日本新聞に連載された山崎英登氏による荒武タミの伝記『荒武タミ女 ゴツタン一代記』



上：荒武タミ(右)と荒武正雄(右)
中・下：橋口晃一(左)と荒武タミ(右)
昭和59年3月18日タミさんのご自宅にて

ラベルソなどのヨーロッパの古楽器を連想します。

タミ師匠のレッスンは音がはっきりする普通の三味線を使ったものでしたが、休憩時間に聴かせて頂く唄にはゴツタンを使用されました。あるときこんなことがありました。「六調子」に乗せていろんな唄の紹介を、とゴツタンを弾き始めた時のことです。タミ師匠のか細い繊細な左手の指が絹糸の弦の上を軽快に踊り跳ね、右手人差し指で弦を弾き、胴に打ちつけたりと、歯切れよい音色が躍るさまに、思わず「凄ゲェ」と感嘆の声を漏らしてしまったのです。すると、師匠が「何が可笑しかっ！」とびしゃり。演奏中に申し訳なく思ったのと同時に、タミ師匠の演奏への集中力の高さを改めて感じたものです。

それからは、しっかりと響きを噛み締めるように聴き入るようになりましたが、タミ師匠の奏でるゴツタンの響きは本当に奥深く、それは古楽器の演奏に重なってみえます。一音一音を大切にラグビーボールのように粒立てて連ねて吹くリコーダーやトラベルソの演奏のように繊細です。素朴な作りだからこそ、演奏の技量で繊細にさまざまに展開できる音の豊かさがあり、革張りにナイロン弦でけたたましく鳴る三味線や金属製のモダンフルートでは醸し出せない深みのある響きです。

そして、ゴツタンが引き立たせる生活に根付いた唄の数々。自然や季節を愛でたり、一年の暮らしの描写、悲しい物語の記録や念仏を唱える祈りの唄、かと思えば、愉快な話題に、恋心を描く愛の唄と、いずれも身近な自然や生活、人の営みに密着したものばかり。Sakaki Mangoさんにアフリカの奥地で親指ピアノをつま弾きながら唄い続ける姿をビデオで紹介して頂いたことがありますが、そんな土着の音楽によく調和する楽器です。

とまあ、ゴツタンは、私にとってそんな存在です。



とりだまりじゅいち

鳥集寿一

荒武タミさんと父・忠男

都城市で会社を経営する鳥集寿一は、父が使用したゴツタンと共に、荒武タミのゴツタン「太郎」を保管している。父は、荒武タミを取材し世に送り出した民俗芸能研究家の鳥集忠男。やがて、荒武タミの弟子となった父は、その後、ゴツタンの名演奏者として知られた。



父が荒武タミさんを知ったのは、取材がきっかけだったと思う。タミさんの唄と演奏をカセットテープに録音し、帰宅後それを文字に起こす。その後思考に入るといのが一連の流れだった。その録音の様子を一度だけ見たことがある。囲炉裏があったタミさんのご自宅でのことだ。父が「今日は……を、……で」とリクエストのようなことを言っていた気がする。タミさんの「はい」との返事を受け、膝付きで近づき身を乗り出す。数十センチの距離をとり、片手で握ったマイクの位置をタミさんの口とゴツタンの中間辺りに決めて録音ボタンを押す。タミさんの唄と演奏が始まり、聞き入りつつも終わりまでその姿勢は崩さなかった。帰りの車中、私が話しかけても父の表情は録音中のそれと同じで会話などなかった。帰宅後はすぐに再生と記録が始まった。晩酌をしながら横のカセットデッキをガチャガチャと操作して、繰り返し何度も聞いてはテープ起こしまで始める(食卓の向かいで音量を抑えながらテレビを見る子供にとっては迷惑だったなあ)。その最中の父の顔はどう表現すればよいだろう。埋もれていたものを発見した、探していたものをやっと見つけたという喜びと同時に、記録し伝えねばならぬという使命感が混じったような表情とでもいおうか。

タミさんが父の取材対象から「師匠どん」になるまでさほどの時間は要しなかったと思う。気づけば、録音機とともにゴツタンも持って行くようになっていたし、晩酌後に弾いていた三味線もゴツタンに変わっていた。依頼された講演会には取材した録音テープは欠かせなかったが、ゴツタンも持参するよう



荒武タミが所有していたゴクタンの中でも一番のお気に入り「太郎」(中央)。晩年、鳥集忠男に託した。

になり、タミさん亡き後は、父の歌と演奏を依頼されるようになった。

2002年の夏、入院中の父にタミさんが語る録音テープを聞かせた。体調がよくない父を励まそうと、私が父の書斎から見つけて持って行ったもので、もちろん父自身が収録したものだ。再生すると父はうっすらと微笑んで聞き入り始めるが、私にはタミさんの語る言葉が全く解らない。カセットテープのラベルから昔話ということしか解らない。実際に会って話したことがある人の言葉なのに！「父ちゃん、おら(俺は)ひとつも(一つも)なぬゆちよいか(何を言っているのか)わからん。父ちゃんな、わかっとな(解かるの?)」と問うた私に、父は返事の代わりにニヤッと笑った。そのテープは父の死後、都城市に寄贈したためもう手元にはない。これだけはとっておけばよかったかと、今では少し後悔している。

父の死後、都城にUターンした私は、父を知る人との交わりを通して考えるようになったことがある。それは、父がゴクタンをはじめ南九州の唄や踊り、伝承などを精力的に調べていたのは、父が自分のアイデンティティの由来を探りたかったのではないかということだ。迫る死を目の前に、父が聞いたタミさんの話の内容はどんなものだったのか知りたい。現代に生きる私自身の由来を知りたい。でき得るならば、それを子供たちにも知ってもらいたいと思う。

永山成子

ながやまなりこ



民謡とゴクタンとの出会い

永山成子は、二十代より三味線を習い、教職員時代に荒武タミの故郷である財部北小学校への赴任を機にゴクタンと出会った。現在は、ゴクタン成音会代表として、財部北小学校や霧島市公民館などでゴクタンと民謡の指導を行う。鹿児島民謡を研究・収集し「鹿児島民謡集」も製作。

私と民謡との出会いの転機は、1997年、入院していた日のある朝、看護師さんと語らいの一言でした。三味線については若い頃から習っていたものの、当時の私は、民謡を習いたいという気持ちがありながら進んで実行に移すことなく、悶々とした入院の日々を送っていました。「あー、疲れた。夕べ民謡の練習があつて……」と嬉しそうに、しかも生き生きと話す彼女の言葉に衝撃を受けたのです。

待ちわびた退院の後、私は民謡教室の門をたたいていました。その日から先生を悩まし続ける私の民謡通いが、始まりました。練習を続ける中で12年の月日が流れ、私は県大会で優勝し、2009年日本民謡協会主催「民謡民舞全国大会」のコンクールで両国国技館の舞台に立つことができました。

しかし、民謡への更なる想いへとかき立てられる転機が私に訪れました。夏のある日、「先生が楽しみに待っておられますよ」と、民謡祭で裏方をご一緒した方からの電話でした。以前、尺八の稽古を勧められ、「横笛なら」と軽い気持ちで返事をしていたことを全く忘れていたのです。この尺八の安楽敏行先生(鹿児島の民謡を唄う会代表)との出会いが、「鹿児島の民謡集を作りたい」という更なる想いへと膨らませたのです。

先生の教室に山積みされている民謡に触れながら、何とかしてこれらの民謡を五線譜に残し、多くの人に知ってもらえることはできないものかと



*1「初牛祭」で初めてゴクタンが披露されたときの様子

考えました。民謡は五線譜には表せないと言われますが、どうにか五線譜の形に変換することで、ある程度は民謡を弾く(吹く)ことができます。先生の許しを得て、大変難儀な作業ではありましたが、民謡集作りへの挑戦を始めることにしました。五線譜のみならず、尺八、三味線、太鼓譜も載せました。これで洋楽器と和楽器の共演もできます。現在、第1～5集までで、83曲掲載することができました。

民謡離れが進み、また高齢化で民謡教室自体が無くなる所もある今日、唄い継がれた貴重な民謡が無くなる危機にあります。そこで、この民謡集が永久に残ることを願って鹿児島県立図書館に寄贈しました。これからの時代に生きる多くの人に見てもらい、民謡を唄い継いでもらえることを願っています。

ゴッタンとの出会いも偶然でした。2003年に赴任した曾於市立財部北小学校(旧曾於郡財部町立北小)の地は、なんとゴッタン奏者「荒武タミさん」出生で有名な地だったのです。また創立百周年を祝う年にもぶつかり、自分にとって未知の楽器であったゴッタンを子どもたちに教え、披露する機会が与えられたのです。

ゴッタンを手にする全校児童27名への指導は、苦戦の日々でした。ゴッタンに勘所の譜尺を貼り、痛がる手に手作りのパチを持たせ、朝のホームルームでは民謡唄の練習をお願いしました。見応えのある舞台にするには!? 悩みに悩み、ついに考

え出したのは、太鼓と横笛、そしてマリimbaと鉄琴という洋楽器と和楽器とのコラボでした。子どもたちには、元気よく唄うことも要求しました。こうして、子どもたちのゴッタン演奏披露は百周年への多大な貢献につながり、たくさんのイベントにも呼ばれるようになりました。今では、当時の子どもたちは中・高生・成人になり、「民謡やゴッタン演奏が、特技になった」と語ります。

看護師さんの一言、尺八への誘いの電話、財部北小への赴任、ゴッタンの存在、百周年が廻ってきたこと、そして同時期に「曾於市観光開発センター」が発足し観光客に披露できるようになったこと、これらは偶然の出会いではあるものの、なぜか民謡とゴッタンに導かれた自分の宿命なのではないかと不思議な感じでもあります。

現在、各地の公民館講座に走り回り、夏休みには子どもたちに教え、「ゴッタンを作ろう」というイベントも実施しています。うれしいことにゴッタンを弾く若者も増え、ギター代わりに弾く人、また国外に持ち帰る人など多種多様です。2017年2月に鹿児島神宮での「初午祭」にて、460年の歴史の中で初めてゴッタンを披露しました。新聞にも大きく掲載頂きました。

これからは民謡とゴッタンの音源を残していくことを目標に、古い鹿児島の民謡の発掘にも益々精進していきたいと思っています。

地域でのゴッタンの取組み 財部北小学校

たからべきたしょうがっこう

「財部北小といえば、ゴッタン」。荒武タミゆかりの地である曾於市財部町の財部北小学校では、教育活動の中でゴッタンの習得と伝承に取り組み、児童全員が練習に励んでいる。全校生徒が20名に満たない小規模校だが、校内外で発表する機会も多い。ゴッタンの音色は、地域のシンボルとして今も受け継がれている。



本校は1909年に「北尋常学校」として開校し、市町村合併により現在の財部北小に改称された。地域の中の学校であり、その結びつきが深い。

財部北小と言えば「ゴッタン演奏」。

木製板三味線(弦楽器)に児童も職員もこれまで向き合ってきた。名の由来も明確でなく杉板で作った三弦の楽器である。杉に囲まれた本校の立地条件から考えると、まさに地域の楽器である。

この地に今も語り継がれている盲目の有名な演奏家がいる。国立劇場に出演し聴衆に大きな感銘を与えた逸材、後に南日本新聞文化賞を受賞した荒武タミさんである。児童は、地域への聞き取りを通してその生き方を学んでいく。

最初からゴッタンを簡単に弾くことはできない。低学年から発達段階に応じた練習が積み重ねられ、児童間においても先輩から後輩へ引き継がれていく。入門期の一年生は、演奏曲の歌のみの練習から入る。歌唱に専念した低学年の声量は、ゴッタンの演奏を一層力強くしていく。学年が上がるにつれ、竹太鼓・木琴・鉄琴など楽器の担当が広がっていく。





夏期休業中も一週間前後の間、暑い体育館で「ふるさと」や「はんや節」「おはら節」等の演奏と唄の練習に励む。職員も同じ汗をかく。教室での発表の声と見違えるほどたくましく誇らしい。

本校には、「財部北ふるさとクラブ」という保護者が主体となる組織があり、また、地元「財部ふるさとを思いやる会 ごったん倶楽部」にも、校外での演奏に際して児童の移動や楽器の運搬等ご協力頂いている。保護者間の意思疎通が図りやすいことが小規模校のよさの一つである。

一学期は、新一年生や新任の先生方を歓迎する場で、夏休みは他校主催のコンサートに招待されたお祭りの舞台上で演奏する。二学期は、地域と合同文化祭のステージで練習の成果を発表する。ま

た文化祭で演奏を鑑賞した他地域の方が、翌年リピーターとして来校され声援をいただくこともある。中には絵手紙に綴ってお礼のお便りをいただくこともある。大きな拍手や励ましが次なる演奏会でのエネルギーに転化していく。中学校の文化祭においても本校卒業生がゴツタンの演奏を他校出身の生徒に披露している。その他、校区での夏祭りや近隣施設の行事にも招かれ出演依頼も多い。児童が奏でるゴツタンの音は、地域のシンボルであり、誇りでもある。

一つの楽器が、時をつなぎ、人をつなぎ、心をつなぎ。伝統文化は、ここ財部北校区においても生き続けている。



齊藤純子 なご(ご)ちゃん



鹿児島でつなぐ ゴツタンの音色

2010年、長い間ゴツタンの弾き手が途絶えていた甌島で、昔から唄い継がれてきた島唄を掘り起こそうとごったん部が結成された。中心となった齊藤純子(旅行会社経営)が部長を務め、現在、小学生から70代まで幅広い年代のメンバーが参加。島には指導者がいなかったため、東京在住の三味線奏者・福居一大の指導のもと練習を続けている。



福居一大先生の指導のもと稽古に励む子ども達。
幼かった子どもも成長し、いずれ島立ちを迎える。



甕島と島立ち

甕島は、東シナ海に浮かぶ島。上甕島・中甕島・下甕島の3つの島から成り、約5千人が暮らしている。島には高校がなく、中学校を卒業すると本土の高校へと進学する。そのことを「島立ち」という。

私が住む上甕島の里町は、約千人の小さな集落。行き交う人が挨拶を交わす小さなコミュニティの中で、地域の人たちに見守られながら育まれた子ども達は、高校進学と同時に島を離れなければならない。私も下宿生活をしながら高校に通ったが、環境の変化は想像をはるかに超えていた。下宿先でも、学校でも、知り合いは1人もいない。私はなかなか馴染めず、高校2年までホームシックで泣いていた。そんな時、支えとなったのは歌だった。甕島には島唄というものがあったので、口ずさむのは、当時好きだった歌手の歌。こうした時に、島の唄があったら、どんなに励みとなっただろうか。

ゴッタンとの出会い

高校・大学・少しの社会人を経て、私は島に帰った。

——島の唄を掘り起こしたい——

当時、仕事の傍ら、現代アートや音楽での地域活性イベントに携わっていた私は、仲間と共に甕島にも残っていたかもしれない島唄を掘り起こす活動を始めた。その時に出会ったのが、「ゴッタン」だった。島の郷土誌を開くと、数々の民芸品の中に唯一の楽器としてゴッタンが掲載されていた。実はそれまでゴッタンのことを知らなかったが、なんと我が家にも残っていた。そして近所に声をかけただけで、あっという間に4～5本集まった。

しかし、島内にゴッタンを演奏される人はおらず、三味線さえ弾ける人がほとんどいない状況だった。沖縄三線をしていた友人に弾き方を教えてもらい、島の唄を一曲だけ演奏しながら細々と活動していた。そんな時、某航空会社の機内誌の取材が舞い込んできた。甕島のゴッタンの記事が全16ページにもわた

毎年開催している「甕島ごったん祭り」。曲目などもみんなで話し合い、本番にむけて稽古する。
楽しみにして下さる島の方々も多い。



って大きく紹介されたのだ。すると、島の子も達や年配の女性らから、「習いたい！うちにもあるから弾けるようになりたい！」との声を次々といただくようになり、嬉しい反面、困り果てた。

福居一大先生との出会いと活動の広がり

いよいよ本気で指導者を探さなくては……。当時活動していたブログで指導者を呼びかけて数か月経った頃、大きな転機が訪れた。鹿児島出身の箏曲演奏家である梶ヶ野亜生先生を通じて、民謡伴奏三味線・太棹三味線奏者福居一大先生とご縁をいただき、指導に来ていただけることになった。

こんな小さな島まで通っていただけるのだろうか。その心配はよそに、福居先生は毎月毎月熱心に島に通ってくださった。福居先生の指導が始まり、子ども達が次々と入部した。先行きの見えなかった真っ暗な道に、一点の光が灯ったような瞬間だった。初めて触れるゴッタンに、真剣なまなざしで向き合う子ども達。その姿を見て、この活動を絶やしていけないと、強く決心したことを覚えている。

今年、創設8年目を迎えた。福居先生の指導の下、九州各地の民謡、島に伝わる曲などを演奏し、昨年はオリジナル曲も完成した。各メディアにも取り上げていただき、2017年は世界に放送されているNHKの番組「Blends」で、和楽器としてゴッタンが紹介された。旅行団体への演奏や行政主催のイベントでの演奏だけでなく、「甕島ごったん祭り」と題して年に一度自主公演も行っており、甕島の文化として定着してきている。

——はなれても いつまでも ここはふるさと——

ゴッタンを弾きながら子どもたちが歌う。この子ども達も近い将来、島を離れる時が来る。寂しいとき、苦しいとき、ふと思い出してほしい。このゴッタンの音色が、いつか心の支えとなることを切に願いながら、私たちの活動も未来につないでいきたい。

地元の若いゴッタン弾きの紹介

素朴だが奥深いゴッタンの音色に惹かれ、演奏を続ける人たちがいる。自身の音楽の中にゴッタンや民謡を取り入れるミュージシャンだけでなく、高校教員、NPO職員、大学生など、そのバックグラウンドは様々だ。小さな頃からゴッタンに親しんで育った世代ではない彼らが、この楽器を愛する理由とは。

Sakaki Mango サカキ マンゴー 文責：橋口晃一

高校二年の時、出身地の「穎娃」のお祭りに参加した後の打ち上げで、ガナ人バンドの演奏の輪に引き込まれたのを契機に、大学ではアフリカの地域文化とスワヒリ語を学び、休学中ニュージーランドでたまたま見つけたCDでリンバ(親指ピアノ)の演奏に嵌り夢中になり、復学したら親指ピアノを卒論テーマにして、いきなりその有名なリンバ奏者を尋ねてタンザニアに赴き弟子入りし、三ヶ月後には論文を執筆しながら人前で演奏を始めたというポケモン(ツワモノ)です。

親指ピアノは儀礼で使われることもあるが元々暇つぶし用に使われるものだったので、ラジオなど娯楽が広がるにつれ見向きもされなくなっていくのが惜しいと、感動を貰った親指ピアノの可能性を広げるべく海外のアーティストともコラボして、国内はもとより世界各地で演奏を続けておられます。

そのMangoさん、数年前から親指ピアノに加えて「ゴッタン」も重要な演奏手段として組み入れられました。きっと、アフリカにおける親指ピアノと、地元鹿児島県のゴッタンに共通の想いを感じてのことだと思います。

Mangoさんはさまざまな民族楽器を駆使し、スワヒリ語と南薩の方言「えいご穎娃語」をとり混ぜて、声高らかな雄叫びから、奥深くも侘びの節回しの唄をはじめ、頭がボーっとしてくる不思議な時空「ンゴマ」を演出、私たちにさまざまな音を体験させてくれます。毎年、キャンプしながら全国そして海外各地に出発しています。是非、Mangoワールドを楽しんでみて下さい。



寺原仁太 てらばるじんた 文責：橋口晃一

鹿児島県の里山、山田村文化センター代表にして「南部式」と「ジャイアントストンプス」のリーダーとして「芋蔓座」を切盛りし、「Newあくまきプロジェクト」では持ち前の唸りを駆使して桃子さん特製(母親監修)の「あくまき」も売りさばく香具師のようなポケモン(ツワモノ)です。

初めてお会いしたのは、2016年暮れのMangoさん主宰のゴッタン繋がり忘年会でした。

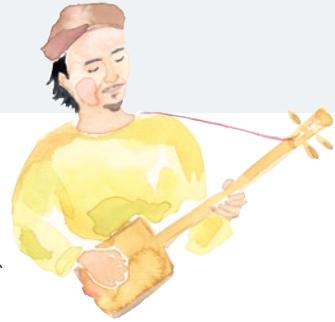
仁太さんはお店が一軒も無い鹿児島県の田舎、山田小学校前のJA跡地を活用して「山田村文化センター」を立ち上げ、子どもたちのために駄菓子屋をオープン。昔ながらのあくまき製造販売も開始されたばかりでしたが、それ以来、私は仁太さんが係わる活動の虜になってしまいました。南部式に魅せられて遥々遠くから集まる仲間や著名なゲストと共に「芋蔓宴席」と銘打ってほぼ定期的に開催される音楽・芸術・演芸・ワークショップなど、あらゆるジャンルで魅力あるイベントを開催し続けておられます。

2017年には鹿児島神宮の初午祭での史上初のゴッタン連の参加に始まり、「芋蔓寄席 春が来たよスペシャル」では度肝を抜かれました。これこそ「お祭り」だと感動も覚めやらない初夏には「橋の下世界音楽祭2017」(愛知県豊田市にて開催)に出演されるなど、全国に広がる仁太さんネットワークのパワーには圧倒され通し。

また年毎に南部式を始めとする仁太さんとご家族の活動の場は見る見る広がり、今では毎週のように全国を廻っておられます。南部式の楽曲は歌詞も曲もすべて仁太さんのオリジナルで、ゴッタンと太鼓で調子がよく心も身体も弾みます。また、宮崎のひょっとこ踊りを立ち上げられた祖父の魂を受け継ぎ、若いときにDJで鍛え上げた感性で織り成す唸り「口上」は、ふうてんの寅さんも顔負けの名調子。是非、生(ライブ)で触れて頂きたい、ゴッタン弾きのアーティストです。



東将寛 ひがしまさひろ



現在、沖縄を拠点にゴツタンと自作の竹笛に様々な楽器(和太鼓、ジェンベ、ドゥンドゥン、鐘、ティンピラ、ギター、ループマシン、自作の打楽器等)を加え、作曲、演奏活動をしている「Harukaze 東風(東将寛)」です。2013年からはゴツタンと共に、台湾への演奏の旅が始まり僕の音楽人生には欠かせない存在となっています。

ゴツタンを弾いていると「どこの国の楽器?」「うわ、軽い?」「懐かしい感じの音色～」とよく言われます。でもその通りで、ジャンルを限定しない包容力と、どんな時にも手元にいてくれる軽快さと、どんな人も哀愁を感じてしまう、ご先祖様感。この三拍子が、ゴツタンの魅力ではないでしょうか。

多国籍な街コザ(沖縄市)の週末、ゴツタンを弾けば米兵たちが踊り出し、ラップバトルが始まり、終わったら老いも若きも国籍問わず「イエーイ!」とハイタッチ。シタールを弾く台湾在住日本人演奏家の友人と合わせた時も、お互いの楽器の相性の良さに驚いた。台東(台湾)のライブでは、原住民ミュージシャンが今のフレーズをもう一度!と、地元の歌をゴツタンにのせて歌ってくれたり。「ゴツタンは懐が深い」と、上牧さんがおっしゃっていたのを思い出します。

ゴツタンとの出会いは、地元大分の古い楽器を調べていた時でした。南九州には杉製の三味線らしきものがあり、早速注文。それなりにワクワクしていたのですが、その「ごったん」、ただ者ではありませんでした。調律して音が合った時の感覚がギターとは全然違うし、それがたまたま気持ちいい。調律することでどんどん音感が自分の中で高まっていく。ギターより圧倒的にレスポンスが良い。弾いていると自然と情景が浮かんでくる。触った日から今までゴツタンに夢中になりました。

その後、感謝を伝えたくなり、ゴツタン製作者の黒木さんとお弟子さんの上牧さんに会いに行きました。お二人の印象が、ゴツタンから伝わってくる感じと同じだったことに大変驚きました。そして、自然があり人が生き「ゴツタン」が存在しているということを宮崎県三股町の山々を眺めながら感じ、ますますゴツタンが愛おしくなりました。

一生、ゴツタンを弾いていると思います。

渡邊竜聖 わたなべりゅうせい



もとより三弦というものに初めて惹きつけられたのは、日韓ワールドカップで盛り上がっていた2002年のことだ。当時高校生であった私は、代表曲「あなたに」などでブレイクした沖縄出身のパンクバンド「MONGOL800」や、連続テレビ小説「まんてん」の主題歌「ワダツミの木」を歌っていた鹿児島県奄美大島出身の「元ちとせ」など、日本の南の島出身の歌に心惹かれた。その中でもBEGINの「島人ぬ宝」という曲は、曲中の三線の甲高い音色がその後の私の音楽人生の基盤となる忘れられないメロディとなった。

鹿児島で教員人生を始めた私は、宮崎県都城市との県境にある曾於市の財部高校(現在は合併し曾於高校)に赴任しゴツタンと出会った。そこで生徒と一緒に「おはら節」や前述の「島人ぬ宝」を演奏をし、閉校される学校を盛り上げた。

現在勤務している国分中央高等学校では、同僚と2人でアコースティックギターとゴツタンで演奏しながらオリジナルソングを歌って活動している。歌の内容は学校や地域をテーマにしたものがほとんどである。演奏でのゴツタンの役割はリードギターのような副旋律を弾くことが多い。三線のメロディのように弾いてみたり、3つの弦に音を割り当て和音のように弾いてみることもある。もっと言えば、左手で軽く弦を抑えてわざと響かないようにしながら右手を大きくストロークするギターのブラッシング奏法のように音を出したり、胴を叩いて打楽器のように音を出して表現したりすることもある。これはゴツタンが木材で作られているからできる音の出し方である。

三味線の調弦の仕方は一の糸をラ(A)の音に合わせれば一本、そこから半音階だけ高くなると二本、三本と増えていく。ギターとゴツタンの音を合わせるためには、曲に応じた調弦が必要となってくるが、西洋音楽には曲がどの音階をもとに作られたかを示す曲のキーが存在する。「島人ぬ宝」でいえばファ(F)が曲のキーとなっており、このとき三線の調弦は1番太い一の糸(三線では男弦と呼ぶが三味線の弦の呼び方で統一をする)からド(C)ファ(F)ド(C)となる四本調子で演奏されている。このことから本調子の場合、キー音が二の糸の開放弦の音と一致するように調弦すれば演奏しやすいということが予想される。しかし、キー音がド(C)の場合、ソ

(G)ド(C)ソ(G)というような十一本調子という調弦となるが、弦の張り具合が緩い(または張りすぎる)ため、演奏としては豊かな音色が出せない。そこで試行錯誤の末、キー音を一の糸に合わせ、また同時に二の糸を全音(半音2つ分)だけ高くした二上がりの調弦にすることで、スムーズな演奏ができるようになった。

従来歌手が自らゴッタンを掻き鳴らしてきたが、これはギターを奏でるシンガーと同じように思える。ゴッタンとギターは音色の相性もものすごくよい。ギターや他の楽器と合奏を楽しみながらゴッタンの新たな可能性を引き出していきたいと思う。

坂元厚太

さかもとこうた



大学生である僕の周りに「ゴッタン」という楽器を知る人はいなかった。僕もゴッタンを始めてからまだ2年経たないくらいで、それ以前は楽器の名すら知らなかった。ゴッタンはそれくらいマイナーな楽器だし、今でもずっと、多くの人がその存在を知らなかったと思う。鹿児島や宮崎南部の山間で、日々の暮らしのなかで細々と引き継がれていたから、日本の芸能の表舞台に立つことが少なかったのかもしれない。

ゴッタンの明確なルーツは分かっていない。誰が「ゴッタン」と名付けたのか、誰が最初に作り始めて、誰が弾き始めたのかも分からない。それらについては諸説あるみたいだが、正直「ホントかよ」って思うことが多い。謎だらけのわりに見た目が素朴でばつとしない。だけど、ゴッタンの音色を聴けば、そんなモヤモヤはどこかに吸い込まれていってしまう。

ゴッタンは名もない人々の楽器であった、と僕は思う。誰がいつ始めたのか分からないけれど、確かに存在し、誰かの記憶のどこかにある。音色の素朴さからも、宮崎県に住んでいた父や祖母から聞く話の節々からも、なんとなくそれを感じる。お座敷で行儀よく弾くのではない、もっと生活の身近にある楽器。僕はそんなゴッタンに出会えたこと、弾いていることに幸せを感じている。

これからゴッタンを残していくときに、今までのゴッタンの「在り方」みたいなことは変わっていくと思う。ゴッタンを飾る床の間のない家が今は多いし、気軽に弾いて歌う生活をおくる人は結構前にいなくなったと思う。ゴッタンは荒武タミさんの功績により一度「発掘」された経緯をもつが、それを伝統として継いでいくのはかなり難しいだろう。だけど、ゴッタンの音色やバックグラウンドに興味を抱く人は少なからずいると思う。僕もそのうちの一人だ。僕は、名もない一人の人間として、これからもゴッタンを弾き続けたい。

松浦麻子

まつうらあさこ



越後賢女を調べているとき偶然、荒武タミさんの「荷方節」^{にかたぶし}を聴きました。私の知っている東北の荷方節とは全然違うもので、流れてくるとなんとも言えない哀愁の音。いったいどんな人がどんな楽器を演奏しているんだ！と衝撃的な出会いでした。

インターネットで「荒武タミ」「ゴッタン」を検索し、新聞社の連載の記事や直接習われたという橋口晃一さんのブログでゴッタンと生前のタミさんの様子をどんどん読みました。その中で、タミさんの「荷方節」を聴いて、念仏を唱え涙する人々がいた、とあり「荷方節」は人々の身近にあったということに感動しました。

私は民謡ユニットで唄っているのですが、慰問などで演奏するときも、一生懸命唄ってくださる方や涙を流してくださる方たちがいて、その時の光景とも重なりました。

民謡は生活に根差したもの。楽しい時もつらい時も共に唄ってきたもの。私もそんな唄を唄いたい、と思っていた私にゴッタンとタミさんの「荷方節」は天啓のように思えました。とにかく「荷方節」をやりたい！と、橋口さんに連絡を取り、上牧さんからゴッタンを購入しました。まったく弦楽器の経験がない私ですが、少しずつですが練習をしています。

まだまだタミさんのお足元にも及びませんが、いろんな方にゴッタンを聴いてもらいたい、知ってもらいたい。そして素朴な昔の唄を歌っていききたいと思います。

原田敬子

はらだけいこ

音楽の宿り木
ゴツタンに出会って



各地のオーケストラから作品を委嘱され国内外で活躍する作曲家である原田敬子は、東京音楽大学などで教鞭もとる、いわば西洋芸術音楽の専門家だ。そんな彼女は、近年、鹿児島や奄美大島の音楽を調査する中でゴツタンと出会った。きっかけは、やはり荒武タミの録音、そして橋口晃一だった。



喜界島・丸善三線工房にて楽器研究中

ゴツタン、この名前の不思議で何となく武骨で可愛い響きは、不思議なご縁の始まりでした。まずはなぜゴツタンに出会ったのかをお話します。私の専門は作曲で、海外で発表する事が多く、(お恥ずかしながら)それをきっかけに日本の音表象の美学や思想、またその源泉に興味を抱き、偶然のご縁で鹿児島県の音文化を調査研究することになりました。丸7年になります。その最初期の「鹿児島伝統の薩摩琵琶」の調査がひと段落する前に、既に沖縄の三線の調査を開始していました。しかし、ある方が奄美島唄の素晴らしさを教えてくれまして、「鹿児島伝統の薩摩琵琶」(武士階級だけに許されていた)だけでなく、鹿児島の民衆が親しんだ音文化(奄美群島を中心とする三線唄を含む)も調査すれば、広大な鹿児島県の音文化を概観することになり、更には日本の音表象の源泉について何かわかるかも知れないと思いました。それで念のために、鹿児島本土に三線は無いのかどうかを確認していた時、ゴツタンを知ったのです。2015年末でした。

間もなく研究協力者の方から荒武タミさんの有名な録音物を頂き、その複層的な倍音による声は、一度聴いただけで忘れられない衝撃の響きでした。2016年春には、ゴツタンを復刻→伝承活動を活性化しているという甕島の齊藤純子さんにインタビュー。しかしそれ以降は情報が得られないまま、2年半の沈黙期。実物のゴツタンを見たこともありませんでした。そして2018年11月、鹿児島市内での私の講演直後に、私の目の前にゴツタンが！いえ、橋口

晃一さんが本物のゴツタンと共に前触れなく現れたのです。

ここからは、橋口晃一さんと黒坂周吾さんについてお話します。あの日のことは忘れません。私の講演中、一番前に座りキラキラと澄んだ綺麗な目を向けていらした方、それが橋口さんでした。その会場で、長らく私の研究にご協力頂いている、鹿児島県歴史資料センター黎明館 前館長の灰床義博氏に、橋口さんをご紹介頂きました。橋口さんが目の前でゴツタンの演奏をして下さった時、ん？どこかで聴いたことのあるような……。私は講演直後で、いつもよりも回らない脳を回転させ、(あっ)「荒武タミさんをご存知ですか？」と何うと、橋口さん「私の師匠です」。まさに失せ物現る！瞬間でした。そう、私はずっと、荒武さんの直弟子を探していたのです。

何え橋口さんは、数学を極めようとして進路に迷っていた頃、荒武さんに弟子入りし、ひと月のうちに13曲を伝授されたとか。その驚異的な吸収力に私は本当に驚きました。子供ではないのにひと月で13曲？歌詞も楽器も？やはり何かを極める時間を過ごした方は違うと感じました。そして橋口さんは、荒武さんやゴツタンの貴重な資料の数々を見事に整理し、希望者にシェアして下さるといふ寛大な方なのです。そして2019年1月、その橋口さんから、伝統芸能アーカイブ&リサーチオフィス[略称:TARO](京都)さんのプロジェクトで、ゴツタンリサーチをされている京都在住の黒坂周吾さんをご紹介頂きました。私はひと月半に1回くらい、京都を通る(寄ることも多い)生活なので、更にワクワクしました。

黒坂さんは生粋のミュージシャン。しかし瞳の奥には知性を感じさせる鋭い光が。和太鼓を核とした京都の「バチホリック」(撥狂い?)というバンドのボーカルで、そこでの黒坂さんのメイン楽器はゴツタンです(が、他にもいろいろな楽器を演奏できるに違いない雰囲気)。黒坂さんにご自分の活動を言語化し、更にそれを他者に生き生きと伝えることができる、正に現役ミュージシャンならではの魅力をお持ちです。研究者肌の橋口さんの音楽への情熱と、黒坂さんのコミュニケーション力や発信力を合わせたら、ゴツタンの過去から未来が連動することで何か、いいことに繋がるのではないかと、の期待を感じます。去る2019年2月2日、京都でのプロジェクトの中間報告会で、黒坂さんはゴツタン製造について、今日だからこそ可能で、且つご自分の音楽活動に直結した試みについて生き生きと立派なプレゼンテーションを

されました。この寄稿文が付されるパンフレットに、その試みに係った方々の記録が読み取れます。

さて、私は地域性の強い伝統音楽の継承の実態について、多くの人々を現地に訪ね、聞き取りを中心とした調査を行ってきました。話のみではなく音楽も目の前で聴き取っています。まだ丸7年を過ぎたところですが、私が確信しているのは、地域の音楽であっても、どこの音楽であっても、音楽の本質的な素晴らしさというのは、「誰も音楽を所有できない」ということに尽きます。たとえば、三線を調査していて最も残念に感じたのは、ある地域では何よりも高貴な楽器で、ある地域では差別の象徴でもある事でした。人間が楽器にヒエラルキーを付けて音楽を利用し、しかも楽器や音楽に差別概念までも押し付けてきた歴史。しかし私は作曲をする者として、音楽は造るものではなく、来てくれるものだという事を強調したいのです。音楽は音楽を唯々愛する人のところにそっと寄り添ってくれるもので、音楽を人間の身勝手な欲で利用しようとすれば、音楽は気付かないうちに去り、いつの間にかいなくなってしまうことを。クラシック音楽のコンクールで勝つためだけにやっている人、余所者は楽器をネタにするな、出て行けという人、何しにきた、これは我々の音楽だという人……。様々な方々を見てきました。そんな人間の心を知って「音楽自身」は、その何よりも美しい身を守るためにinvisible(見えない)という存在を選択したのではないかと私は感じています。それはまるで愛であり、心であり、空気であり(音は空気の振動)、呼吸であって、体温のような暖かさで、音楽を愛する人にそっと寄り添ってくれます。

いま、私は奄美群島の三線唄の継承を集中的に調査しています。奄美は一度も独立「国」として政治的システムを持ったことがありません。それゆえ伝統の島唄音楽も自由です(著作権フリーです)。例えば喜界島では「島唄は先祖から引き継いだ宝」と呼び、敬意の心を忘れません。音楽が宿る場所、それは人間ではなく、音楽自身が選んで決めているようだと感じています。どんな音楽でも違いはありません。橋口さん、黒坂さんというお二人がゴッタンを選んだようで、実はゴッタンから選ばれた方々なのではないでしょうか。黒坂さんのゴッタンリサーチや、橋口さんの資料整備は非常に貴重な仕事です。心より応援しております。

[はらだ・けいこ/作曲家・東京音楽大学 作曲芸術 准教授・「伝統の身体・創造の呼吸」代表]

今や数人しかいないと言われるゴッタン職人。その技術を受け継ぐ情熱を胸に製作を続けるのが、宮崎県三股町に工房を構える若き職人・上牧正輝だ。宮崎県伝統工芸士にも認定された名人・黒木俊美との出会いから、ゴッタン製作を始めて約15年。地域の文化を守り、ゴッタンの可能性を追求する挑戦が続く。

黒木師匠と平原さんとの出会い
私の取り組みについて

上牧正輝

かみまきまこと



2018年11月 美木工房にて 左:上牧正輝 中央:黒坂周吾 右:橋口晃一

私がゴッタンと出会うきっかけになったのは、やはり黒木師匠との出会いからでした。それまでゴッタンの名前すら聞いたことのない私は当時、楽器がひとつできたらいいなとひそかに思っていました。そんな時に、私の働いていた製材所に黒木師匠が下請けで入って来られたのです。仕事が終わってみんなが帰る頃に私に話しかけて来られ「ゴッタンを知っているか？」と聞かれ、「ゴッタンを作っているんだ。君にも作ってやろう」と私の為に一本作って下さいました。黒木師匠は工房を自宅に持たれていて、休みの日に工房に見学に行き、黒木師匠の卓越した技を拝見しました。ゴッタンを作る技術も素晴らしいですが、それ以上に木工に対する師匠の姿勢に私の感性は激しく揺さぶられました。

私は黒木師匠と交流を重ねるうちにゴッタンを作るようになっていきました。私の家系もゴッタンと深い縁があり、母が曾祖父が作ったゴッタンを見つけて私の前に持ってきた時は、その深い縁を感じずにはいられませんでした。荒武タミの弟子だった私の祖母が、小さい頃に財部町の祖母の家で弾いていたのをうっすらと思い出し、また黒木師匠にゴッタンの製作方法を習いながら、自分も弾けるようになるために宮崎県山之口町のゴッタンクラブに通うようになりました。その音色を聞いて懐かしい想いが沸々と沸き上がり、この音色を絶やす訳にはいかないと想いが強くなりました。

そうした黒木師匠との交流と修行の中で日々深まる想いと裏腹に、師匠の体調はだんだんと悪化していました。2011年12月、師匠は脳出血で倒れ、ゴッタンを作ることが困難になってしまいます。

私はいよいよ自分の置かれた立場に覚悟を決めざるをえませんでした。師匠の病状が悪化していくと、私は製作したものを師匠に見せ指導を受ける形でだんだんと独り立ちの歩を進めていきました。そして今では自分の実家に工房を作り、師匠から受け継いでゴッタンを製作しています。

祖母が暮らした財部の町には祖母の姉妹もおり、ゴッタンを今でも弾いています。そのゴッタンを作ったのは平原利秋さんです。平原さんのゴッタンは棹が太く胴も厚く大きい物です。元々大工の平原さんはその腕を生かして、沢山のゴッタンを地元提供されていました。

私は黒木師匠の作るゴッタンを受け継ぎ、修行をしていく中で荒武タミが晩年を生きた財部町のゴッタンにも興味が沸きました。財部町にある地元の道の駅にはゴッタンが数種類おいてありますが、平原さんのゴッタンは別格の存在で、その音色も澄んで鳴りも良いものでした。しかし最近では平原さんもご高齢になり、作る事が難しく後継者がいないことを嘆いておられると聞き及びました。良いゴッタンが無くなっていくことが忍びなく、私は黒木師匠のゴッタンと平原さんのゴッタンを習得し後継していくことを決めました。まだ平原さんのゴッタンを作ったことはありませんが、そのゴッタンを修理に持ってくる方が大勢います。そのゴッタンから平原さんがどのような流れで製作を進めていたのかがわかり、元々のサイズは黒木師匠とおなじ原寸だったことを知り、源流を守ることの大切さを改めて痛感しました。

私は源流のゴッタンを守りながら、黒坂さんが求める新しいタイプや橋口さんが教えて下さった小さいサイズのゴッタンなども徐々に形にしながら、いろいろな人の様々な意見を聞きゴッタンを作ってみようと思っています。また、ゴッタンをエレキ化することにも挑戦をして、幅広い方に使っていただけるように工夫することで、より個性的で独創的な楽器にしていけるようにしていきたいと思っています。

わたしの伯父(祖父の弟)も大工をしていて、ゴッタンを作ろうかと思っていたと母に言っていたのですが、私が作っていることを話したら「そうか、それならばいい」と、作らなかつたと聞きました。「人に必要とされるならば誰かが引き継がなければいけない」という想いが財部町のゴッタンを守ってきた人たちの中にはありました。その想いや血が私を突き動かしているようにも思います。

ゴッタンが三味線やサンシン(三線)のように全国に広まり、沢山の方がゴッタンに興味を持ち、弾いてみたい、作ってみたいと思えるようになることを願っています。



あとがき

黒坂周吾

くろさかしゅうご

「明日はタミさんの誕生日なんです」「はい知ってます(笑)」

今回のプロジェクトの共同代表である橋口さんから連絡を頂いてそんなやりとりをした時、ちょうど傍らには荒武タミさんと共に歩んだ民俗芸能研究家の鳥集忠男先生の本がありました。そしてじつはさっきまで再読しながら、自分でも少し驚くほど目頭が熱くなっていたのを電話口でバレない様に誤魔化した自分が滑稽に思えたのでした。いつかずっと先の未来の誰かの道標となる音や言葉を残して下さった事は本当に有難い、と偉大なる先達の方々に想い馳せながら改めて深く感じます。

初めてゴッタンと出会ったのは、今から10年程前に演奏で九州を回る機会があった際に、当時はまだゴッタンを作られていた黒木俊美さんの工房を訪ねたのが最初でした。音も造形も素朴で美しくすっかり魅了されてしまいました。そしてその後送って頂いたゴッタンの音源を聴いてまた大きな感動を覚えました。

京都に戻ってから自己流で弾きつつ、黒木さんが繋いで下さったお弟子さんの上牧正輝さんと時折やり取りをしながら楽器に改良を加えて頂き、日々の演奏に使用してきました。

一方でずっと長い間「ゴッタンのルーツを訪ねて歩き色んな事を見聞きたい」という思いを持っていました。音楽はその土地の風土や生活に根ざしているものだと思うからです。土地から離れ、その音楽を愛する人々の気持ちから離れた所で、根の無い楽器や音楽が先走ってしまう事への不安な気持ちを抱えていたからだとも思います。だからこそ、その息吹を直接感じたいと願ったのだと思います。

そんな折、旅先案内人となって下さったのが荒武タミさんの最後のお弟子さんである橋口晃一さんでした。2017年の春、そして2018年の秋に鹿児島・宮崎に滞在し多くの方々にお会いしました。財部北小学校や成音会でご指導されている永山成子先生の稽古場にお邪魔し、ゴッタンや鹿児島県の民謡のお話を聞かせて頂きました。また福居一大会 甕島ごったん部の皆様の所へもお邪魔しました。そして上牧さんと橋口さんにご案内頂き、長年ゴッタンを作られてきた黒木俊美さんや平原利秋さんにも会いお話を聞かせて頂きました。また同時に、現在ゴッタンを演奏されている若手の皆様ともお会いする機会に恵まれました。行く先々で見せて頂く個性溢れるゴッタンに出逢う度、その音にさらに惹かれていく自分がいました。

ゴッタンは一度足を踏み入れてしまえば、とても深く、多様で、一括りにして語る事などとてもできないものでし

た。現地では「幻の楽器」でもなく、「廃れて」もなく、今でも丁寧に作られ、大切に演奏する方々が存在する、現在進行形のとても豊かな音楽の世界でした。楽器の質も音色も音楽性も多様なまま存在し、容易にはわからなくて余計に魅入られていく世界。それが土着の音楽というものなのかもしれないと思います。

都会で生まれ育った自分が胸の内にずっと抱き続けているコンプレックスの様なものがあります。故郷を持たず、地域の連帯や、その土地に連綿と連なる文脈の中に自分を置く事ができませんでした。だからこそ郷土芸能の力強さに強く惹かれたし、それは憧れであり、尊敬の念であり、音楽に取り組む自分にとっていつも道標でもありました。

しかし、自分の様な外者が、一過性の短い期間でその土地に赴き人々がずっと大切にしてきたものを収集して回るだけでは、長い時間をかけて大切に育てている地元の人達の間や気持ちを荒らすことになります。また一方で地元も決してゴッタンに対する思いも一様ではないからこそ、更に丁寧な関わりが必要になります。たとえ注意を払っていたつもりでも、それでも失敗を起こします。郷土のものを手に表現活動をする自分にとって、文化の侵略者の様になってしまう事は自分の本意に根本から反する事になり堪え難い苦痛を生みます。自分がそういう存在になってしまうのでは……という恐怖心をどこかで常に抱えています。じつは今回のプロジェクトを通して取り返しのつかない失敗もありました。すぐには行けない遠い場所であるが故に難しい事もありました。一方で、お会いする方々のゴッタンに対する深い想いに対峙する度に、感動と共に自分の未熟さを実感しました。それでも尚、ゴッタンのことをもっと知りたいと歩みを進める自分の背中を押してくれたのもまた地元の方々のゴッタンに対する熱い想いでした。

ゴッタン。身近な木材で自ら作り、生活の傍らに置き、弾き歌っていた音楽。それは人間の根源的な音楽への接し方だと思いました。人が生きることそのものを、そのまま込めた音楽だと思いました。そんなゴッタンの音を持つ美しさに自分は魅了されてしまったのだと思います。

その美しさを踏まえつつも、楽器や音楽性に関しては新しい可能性を模索して挑戦してみたい気持ちがあります。なぜなら今自分達はこの時代に生きているから。いつの時代であれ先人達が一生懸命生きてきた様に、その営みの中にあった音の力をお借りして自分達もまたこの時代に対峙して生き抜いていきたい、そして次の世代にその生きる力を受け渡していきたい。少々大袈裟かもしれませんが、ゴッタンの音色から感じる生命力に触れた時、そんな気持ちが湧いてきます。

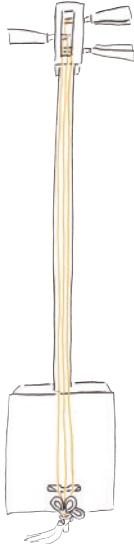
この冊子に執筆して下さった皆様の文章ひとつひとつに記されたゴッタンへの想いに胸が熱くなります。そして、行く先々で沢山のご迷惑をおかけした事を皆様に深くお詫びすると共に、現地にて多大なるお力添えを頂いた多くの方々に心より厚く御礼申し上げます。関わって下さったすべての方が、自分にとってはとても貴重な出逢いでした。ゴッタンに関わる皆さんを心から尊敬し、有難く思います。

これからもゴッタンに魅せられた一人として、歩みは遅くても大切に時間をかけてゴッタンに関わり、ゴッタンを愛する方々との交流を一步一步深めていけたらと思っています。そして、叶うならばこの冊子を手にとって頂いた方々にゴッタンの素晴らしさを知って頂けたら幸いです。



伝統芸能アーカイブ&リサーチオフィス(TARO)は、歴史を通じて形成されてきた伝統芸能文化を発信し将来に継承する拠点施設「伝統芸能文化センター」が備えるべき機能(研究・創造・普及・窓口、ネットワーク・コーディネート、国内外への発信・交流)の強化を目指して、さまざまな取り組みを行っています。

伝統芸能アーカイブ&リサーチオフィス
ウェブサイト <http://www.traditional-arts.org/>



発行：ゴッタンプロジェクト(橋口晃一、黒坂周吾)／伝統芸能アーカイブ&リサーチオフィス

2019年3月30日 初版発行

伝統芸能アーカイブ&リサーチオフィス

Traditional Arts Archive & Research Office (TARO)

〒604-8156 京都市中京区室町通蛸薬師下る山伏山町546-2 京都芸術センター内

Tel.075-255-9600 Fax.075-213-1004 mail.taro@kac.or.jp

<http://www.traditional-arts.org/>

本誌掲載の写真・記事等の無断複写・転載・デジタル化を禁じます。